

瀬戸内海二神島を中心とする 日本常民文化研究所の調査・研究の軌跡

田上
繁

二神家を中心とする二神島の調査・研究（写真1・2）は、すでに財団法人日本常民文化研究所時代から着手されており、本研究所が神奈川大学に移管された一九八二年以降も断続的に行われてきた。したがって、これまでの二神島の調査・研究を総括しようとするならば、財団法人時代の活動の内容から述べなければならない。

ところで、一九二一年に渋沢敬三が創設したアチックミュージ엄ソサエティから始まる本研究所の長い歴史を振り返ってみると、时期的にはアチックミュージ엄時代、財団法人日本常民文化研究所時代、神奈川大学日本常民文化研究所時代の三つに大きく区分される。その中で、二神島に関する調査・研究は、財団法人時代と神奈川大学時代の二つの時期において進められた。そのため、ここでは神奈川大学へ招致された一九八二年を境に財団法人時代の活動と、それ以後の神奈川大学時代の活動に分けて記述することにした。さらに、神奈川大学時代では、それぞれの事業の内容と性格からⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の三つの時期に分けることができる。以下、この区分に応じて解説を加えていくとともに、これら一連の活動を時系列的に把握するため各時期ごとの事業の内容を列記することにする。なお、その際登場する人物の所属や肩書は当時のものを記している。

ただ、その場合、参加者や関与者については、紙幅の関係から本研究所の所員・職員の名前を銘記するにとどめた。数十回に及ぶ調査や研究所での諸作業には、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所の院生を始め、他研究科院生、他学部生の参加を仰いだ。その延人数は数百人にも及ぶ。また、現地調査に際しては、資料所蔵者や島民の皆様、常に調査の案内役を買ってくださった二神島出身の豊田渉氏、さらには、二神家系譜研究会の方々、瀬戸内海に関する歴史研究者や各機関の関係者から



写真1 二神島全景（愛媛県松山市 撮影／香月洋一郎）

も多大なお世話をいただいた。こうした方々のご支援、ご助言がなければ、二神島と二神家の調査・研究は決して推進できなかったであろう。

ところで、本稿の最後の部分では、財団法人時代から始まったこれまでの調査・研究の成果などをすべて書き上げている。ここで引用している論稿も多いので、参考にしていただければ幸いである。

〔1〕財団法人時代の活動（一九五〇年～一九八一年）

一九四二年にアチックミュージアムから日本常民文化研究所に名称変更した本研究所は、一九四九年一〇月、水産庁の委託を受けて「漁業制度資料調査保存事業」に着手することになる。同年一二月には、財団法人日本常民文化研究所として認可された。当時、研究所員として本事業に携わった網野善彦（写真3）によれば、その事業は東京月島（中央区）の東海区水産研究所の一室で進められたが、漁業制度改革を内実あらしめるためとの名目で、全国各地の漁村の古文書を借用、寄贈などの方法で収集、整理目録等を、刊行する業務を推進し、本格的な資料館、文書館を設立してそれを永続的なものにしようにするのが目標であったという（『古文書返却の旅』中公新書、一九九九年一〇月。以下、特に断らない限り、同書を主たる参考文献としている）。

当初の計画では、一応、期間は四年間とされ、初年度の予算額は一三四万円であった。これは、現在の貨幣価値に換算すると、一億六千万円に相当するほどの額である。なお、瀬戸内海については別仕立ての「瀬戸内海漁業制度資料調査保存事業」（初年度予算額六八万円）が推進され、宮本常一が担当した。これは、「瀬戸内海区は特に問題も多いので平行的に毎年之を行い蒐集を開始することとした」という趣旨から進められたものであった（宇野脩平「漁業制度資料保存要項」水産庁資料整備委員会、一九五〇年）。引用文中の「特に問題も多い」というのは、当時、おそらく旧法から新法へと漁業法が移行される時期であったことと、瀬戸内海が特に漁業紛争の多い地域であったことが関連するであろう。

宮本は早速、一九五一年一二月一八日に二神島を訪れ、「二神漁業協同組合文書」と「二神道夫家文書」を採訪している。この調査で筆写稿本「二神漁業協同組合文書」が作成された（『私の日本地図』四 瀬戸内海Ⅰ、同友館、一九六八年）。宮本の『私の日本地図』四には、二神島と由利島に関する記述と二神島の往時の写真も二十四枚収録されている。



写真2 二神家中世文書。近世、近代も含め、その数は7000点以上にのぼる

こうした「漁業制度資料調査保存事業」で二神島が調査対象地として選ばれた理由については、網野の言を借りれば次のようになる。戦前以来の日本常民文化研究所のメンバーであった伊豆川浅吉が水産庁から「共同漁業権の性格に関する研究」を委嘱され、その課題を遂行する上で二神島がその一つとして選ばれたため、調査が行われることになった。一九五四年八月二一日、月島分室の同僚で広島文理科大学出身の河岡武春（写真4）とともに、網野もこの島を訪ねることになる。網野は、二神島が調査地となった経緯について、宮本がすでに一九五一年一月一八日から二〇日までの期間の前後に、月島の調査員として二神島に入っており、当時、宮本を師と仰いでいた河岡がその調査の結果を聞いていたので、伊豆川が二神島を調査地と決めたのも、河岡の意見を取り入れたからではないかと推測している。

網野は、この二神島の調査のとき、「二神道夫家文書」を借用することになる。そのころ、事業の予算打ち切りといった噂が流れて、月島分室の前途には翳りが見えていた。このような状況下で、河岡は文書を借用することにより積極的にではなく、網野自身も多少の躊躇はあったものの、「文書の魅力にひかれて」中世文書四巻、近世文書多数を含む文書の借用を二神司朗・道夫ご兄弟に申し出たのである。借用することに不安を抱きながらも、夏休みで帰省中であった司朗氏のお口添えもあって「二神文書」のすべてを拝借することになった。

東京の月島分室に戻った網野は、「二神文書」の仮目録、筆写稿本「二神道夫家文書」の作成を急ぎ、「二神文書」を借用した翌一九五五年に水産庁の予算が打ち切られた後もアルバイトなどをしながら、『共同漁業権への依存度に関する調査』（水産庁、一九五六年）の「第四 愛媛県温泉郡二神島」を河岡との連名で執筆した（本書に再録）。一九五七年には月島分室は完全に消滅し、研究員が各地から借用した多くの文書は、当時、研究所の事業を主導されていた宇野脩平に託され、勤務先の東京女子大学に一時引き取られていった。その中には「二神文書」も含まれており、それから五、六年後、中島町誌編纂の機会に、これらの文書は島に返されることになった。そのときの実際の移動には網野は立ち会うことはできず、返却したという話は宇野から聞いたものであった。ところが、特別に宇野に預けておいた中世文書は返却されたが、その中世文書とともに早急に返却して欲しい旨を宇野に強く依頼していた近世文書の一部は、最終的には未返却のまま取り残されてしまった。



写真4 月島分室で仕事をする河岡武春



写真3 月島分室で仕事をする網野善彦

① 一九五〇年二月一日 宮本常一が二神島を訪問

「二神漁業協同組合文書」と「二神道夫家文書」を採訪している。

② 一九五四年八月二日 網野善彦・河岡武春が二神島を訪問

「漁業制度資料調査保存事業」の一環として訪問したものである。

③ 一九六八年ごろ 宇野脩平により「二神道夫家文書」の一部返還

「二神道夫家文書」は中島町誌編纂を契機として返却されたが、近世文書の一部が未返却となり、一九八二年の神奈川大学日本常民文化研究所発足のときに発覚する。

〔2〕神奈川大学時代Ⅰ期の活動（一九八二年～一九八五年三月）

このⅠ期は、常民研が神奈川大学に招致された一九八二年から一九八五年までの期間で、借用文書の返却を通して新たな調査・研究が展開していった時期である。

すべての「二神文書」が返却されたと思っていた網野は、研究所が神奈川大学に招致されるとき、「二神文書」の一部が未返却のままであることに気づかされる。筆写すべきものを分類していたときに、筆写必要なしと別置していた文書が返却漏れとなったことが判明し、直ちに一九八二年十一月、神奈川大学日本常民研究所に勤める田島佳也を伴って返却のため二神島の二神家を訪問した。愛媛県史編纂委員であった山内譲氏も合流し、三名で二神司朗氏に会うこととなった。厳しい叱責を覚悟していた網野に対し、司朗氏は温かく迎えてくれ、許しをいただいただけでなく、予想もしない文書寄託の申し出をなされたのである。過疎化の波に襲われる二神島の現状を目の当たりにした網野は、伝来の貴重な古文書を文化財として、また、研究資料として確実に保存したいという、司朗氏のお気持ちにできる限り応える決心をしたと、当時の申し出を受けた心境を語っている。

こうして寄託された「二神文書」のすべては、再び東京に向けて送られることになった。量の多い近世・近代文書は宿泊先とした西野勇夫氏に郵送を依頼し、中世文書四巻、系図四巻は持参して帰京する手筈が整えられた。「二神文書」返却のための訪問は、逆に貴重な文書をお預かりする旅に交じる結果となった。この訪問では、もう一つ大きな収穫があった。司朗氏が見せてくれた箱には相当量の古銭が入っており、中には、宋銭、元銭、明銭と寛永通宝に混じって、かなりの清銭が含まれていることを知りえたからである。この調査は時間がなかったため、再調査を期して網野らは島を後にした。



写真5 二神島の民家

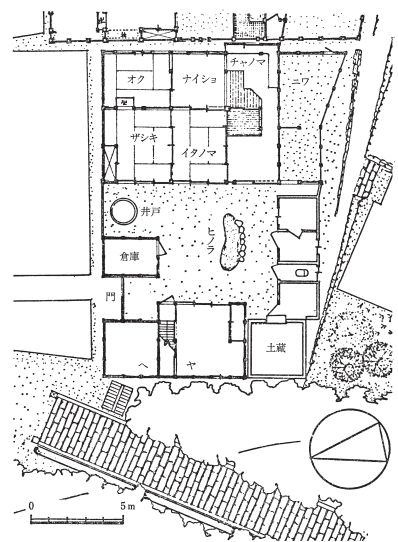


図1 二神島民家の平面図

そして、翌一九八三年七月一日、網野は、先の山内氏を誘って古銭の詳細な調査と、中世文書及び近世初期の文書に現れる小地名を調べるため二神島に赴いた。この調査でも、司朗氏は便宜を図ってくれただけでなく、古銭まで研究所に持参して調査を続けてよいとの意向を伝えられたのである。こうした二神島と二神家の調査・研究は、神奈川大学の研究所に受け容れられ、一九八五年八月、網野や田島、神奈川大学工学部建築学科教授で所員の西和夫たちは、二神島や中島を訪ねて調査を実施した。その調査では、町役場や松山地方法務局中島出張所に保管されている帳簿類、二神島の漁業協同組合の文書類を調査し、写真撮影などを行った。

ここで予備的な調査を行った西は、同年九月二日から一七日まで、建築学科助手津田良樹を始め多くの院生、学生たちの協力を得て、二神島の集落と民家の調査に取りかかった。西はその成果を「二神島の集落と民家―集落の空間構成、民家の特色と家に祀る神々のことなど」(『歴史と民俗』二)と題する論稿にまとめた。ここでは、主屋と隠居部屋となるヘヤとの間にヒノラとよばれる中庭を介して向き合う中庭形式ともいえるべき配置を持つ民家に二神島の特色を見出している(図1・写真5)。この斬新な研究の後、しばらく研究所による二神島の調査は行われなかった。

④ 一九八二年十一月 資料の返却・民家網羅調査を実施

二神司朗氏より中世文書寄託の申し出があり、受託する。「網野・田島佳也」

⑤ 一九八三年七月一日 古銭、小地名の調査のための調査

前回一九八二年十一月の調査時に確認した古銭と小地名の調査を実施した。「網野・西和夫・田島」

⑥ 一九八五年八月 二神島漁業協同組合文書、中島出張所保管文書の調査

中島町役場や松山地方法務局中島出張所に保管されている帳簿類、二神島の漁業協同組合の文書などを調査し、写真撮影などを行った。「網野・西・田島」

⑦ 一九八五年九月二日～一七日 建築史班による集落、民家の調査を実施

前回の予備調査に基づき二神島の集落と民家の調査に本格的に取りかかった。この調査は多数の大学院生と学部生たちの協力を得て行われた。「西・津田良樹」

〔3〕 神奈川大学時代Ⅱ期の活動(一九九四年四月～二〇〇七年三月)

Ⅱ期は、すべての「二神文書」が神奈川大学に譲渡されたのを契機に、調査・研究が新たな段階に入った一九九四年から二〇〇七年に至る期間である。



写真6 右より二神司朗氏、網野、西和夫(1995年)

一九八五年九月に建築史班が二神島の民家の調査を実施して以来、現地調査はしばらく見送られたが、その後、司朗氏が上京して「二神文書」の保管状態を確認されるなど、二神島との関係は途切れることはなかった。その際、司朗氏は、網野と当時の所長であった山口徹とも面会している。そして、一九九四年四月、二神島の出身で松山市の牛淵ミュージアムの館長中田和邦氏を通じて、司朗氏が研究所で預かっている文書のすべてを、正式に神奈川大学に譲渡したい旨の申し入れをなされたのを契機に、島との交流、二神家と二神島の調査は新たな局面に入った。

大学当局はこの提案に応ずる用意を示したので、同年四月から所長に就任した西と網野が、七月一日及び一〇月二七日に松山へ出向き、司朗氏と中田氏とに会って話をつめ、「二神文書」（中世文書四巻、系図三巻、近世・近代文書）と古銭を二神家から研究所に譲渡する手続きを終えた。そしてその際、司朗氏からの申し出により、「二神家系図」一巻を二神家に返却するとともに、改めて研究所が二神島と二神家について、総合的な調査を再開することを約束した（網野善彦「二神島の調査について」『歴史と民俗』一三〇）。

調査・研究の新たな展開は、「瀬戸内海の総合的研究」として、一九九五年三月二八日、二九日の網野、西、研究所職員窪田涼子、建築学科大学院生による予備調査から始まった。司朗氏の許諾と、中田氏の協力を得て、西は二神家の屋敷の実測を行い、網野と窪田は二神家において文書の再調査を実施した（写真6）。その結果、新たに近世・近代の文書と帳簿が発見された（第二次探訪文書）。この結果をふまえて、研究所は同年七月三一日から八月四日まで、改めて二神島と二神家、由利島の総合的な調査に取りかかった。新出文書については、関口博巨を中心に研究所員が現地で一応の整理を行い（関口博巨「二神家文書の概要調査と整理」『歴史と民俗』一三〇）、安養寺所蔵の大般若経に関する調査は、白水智らによってその奥書のすべてを撮影した（白水智「二神島安養寺所蔵 大般若経の奥書について」『歴史と民俗』一三〇）。この調査には、歴史民俗資料科学研究科の大学院生が大勢参加し、短い期間で仕事を成し遂げることができた。

また、西は前回に調査できなかった民家の補充調査を行うとともに、由利島に残る神社の社殿を調査した。この調査により社殿内部の板壁に、墨書で安永四年（一七七五）九月に社殿を再建した二神新四郎種章が自らを「庄官」と署名していることを発見し（写真7・8）、そこにこの島に対する二神氏の強い意気込みが見られるとしている。この調査にも建築学科の大学院生が多数加わって作業を進めた。



写真7 由利神社

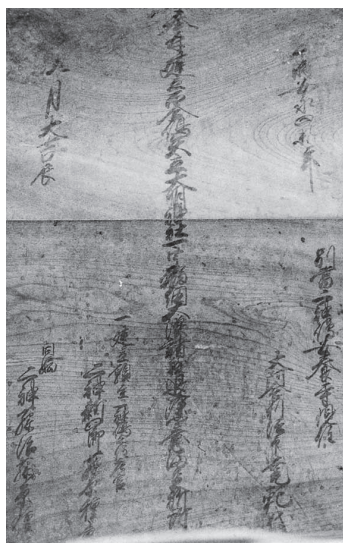


写真8 由利神社社殿内部板壁墨書

さらに、由利島については研究所からの委託という形で、鶴見大学の大三輪龍彦氏、河野真知郎氏、東国歴史考古学研究所の田代郁夫氏、奥寺宏之氏に考古学の立場からの調査を依頼した。この考古調査では、入江の低地の池の中に弥生時代の土器片をかなり発見したが、中世末期の焼物の破片一点だけ採取するにとどまった。こうして由利島の本格的な調査は後日を期するほかなかったが、四氏は二神家の墓地を調査し、同家所蔵の過去帳と系図を突き合わせることににより、墓石に刻まれた人々の俗名をほぼすべて明らかにした。それにより、この墓地が近世以降の二神家の墓地であることが明証された。また、江戸初期の家型の墓碑は、朝鮮半島のそれと比較する必要があるとの判断がなされ、さらには、基壇の一部に五輪塔の頭が見えることも判明した。

このほか呉女子短期大学の吉村典子氏が調査に参加され、産育の民俗調査を独自で行われた。調査期間中の八月三日には、ジ・アース主催で「地域」をよみなおす」と題するシンポジウムが二神島公民館で開催され、網野も講演者の一人として加わった。また、この総合調査終了後も、研究所では白水による二神家伝来の古銭の詳細な調査・点検が行われ、その成果は、「二神家伝来の古銭について」(『歴史と民俗』一三)に結実した。加えて、兵庫埋蔵銭調査会の永井久美男氏もこの古銭を綿密に調査した上で、「近世銭貨の流通―二神家伝来古銭の調査を中心として」(『歴史と民俗』一四)にまとめられた。

一九九六年三月一四日から一六日まで、二神家墓地第一次調査が先の四氏と東国歴史考古学研究所のメンバーによって実施された。山の斜面に設けられた一つの基壇を整備した結果、一四世紀に遡るかと思られる五輪塔を始め多くの石塔、石造物の存在が確認できた。これによってこの山の斜面が、一四、五世紀から現在に至る二神氏の墓所であったとの結論には迫りついたので、調査は大きな成果をあげることができた。この結果を受けて、今後本格的な発掘作業を進めることについても、あらゆる角度から検討された。そして、一九九七年三月一四―一八日には、東国歴史考古学研究所に委託し二神家墓地第二次調査を実施した(写真9)。その後、二神家墓地第三次調査のため、一九九九年一月二日―一四日の中島町長、教育長、愛媛新聞社などへの挨拶や、二〇〇〇年一月一六日の墓地地権者へ承諾を得るために岡山県へ出張するなど調査の準備を進め、調査は神奈川大学共同研究奨励金を一九九九年度、二〇〇〇年度の二か年の交付により実施された。二〇〇〇年三月八日―二二日に行われた二神家墓地第三次調査のときには、紀伊國屋書店により発掘の様子を収めるビデオ「二神島」の撮影も行われた。こうした三回にわたる二神家墓地調査の成果については、二〇〇〇年九月に



写真9 二神家墓地調査 (1997年)

中島町文化講演会において、また、同年一〇月には本研究所の常民研究会において、それぞれ中間報告会を行った。ビデオ「二神島」の映写会も、二〇〇一年二月に神奈川大学図書館で、二〇〇一年三月一六日には二神島の二神集会所で開催した。

上記のような神奈川大学時代Ⅱ期の一連の調査によって、二神島を始め二神家、由利島の歴史民俗がかなり明確になったのは間違いない。研究所においても、一九九六年一月一六日から一八日まで二泊三日の合宿を行うなど、「二神文書」の近世・近代文書の目録の作成を進めた。研究成果の発信についても、一九九九年五月三〇日に関口が「第一回二神島交流会記念講演会」で講演し、『海の民ふたがみ』第一号、二〇〇〇年九月）、二〇〇一年九月には、橘川俊忠が「二神島調査でし残した事」と題し、今後の二神に対する研究所の取り組みを報告する『海の民ふたがみ』第四号、二〇〇二年四月）など、積極的に取り組んだ。この後も二〇〇二年一月二二日の本研究所で行われた関口の「二神家・二神島・由利島」報告、二〇〇二年九月一日の二神島交流会における橘川・関口の「二神司朗家文書の整理と研究」報告（『海の民ふたがみ』第五号、二〇〇三年四月）など研究成果の発表を行っている。

⑧ 一九四四年一〇月 二神司朗氏の申し出により二神家文書の寄贈受託

二神司朗氏の申し出により「二神文書」が譲渡される。そのうち司朗氏の希望により「二神家系図」一巻を二神家に返却するとともに、改めて研究所が二神島と二神家について総合的な調査を再開することを約束した。〔網野・西〕

⑨ 一九九五年三月二八日～二九日 屋敷の実測、文書予備調査を実施

近世・近代文書および帳簿の調査を進めた（第二次探訪文書。写真10）。また、若干の新出文書を発見した。〔網野・西・窪田涼子〕

⑩ 一九九五年七月三十一日～八月一日 二神司朗家文書と由利島の考古調査を実施

第二次探訪文書現状記録、安養寺大般若経、由利島等の調査を行った（写真11）。由利島の社殿内部の板壁に「庄官」の署名があるのを発見する。また、ジ・アース主催のシンポジウムで網野が講演した。〔網野・西・橘川俊忠・田島・田上繁・窪田・関口博巨・白水智・越智信也・岩田みゆき・河野通明・山口徹・鶴見大学・東国歴史考古学研究所〕

⑪ 一九九六年三月一四日～一六日 二神家墓地第一次調査と第二次探訪文書の調査

墓地の調査によって一五世紀の五輪塔を始め多数の石塔・石塔物が発見された。〔網野・橘川・田上・西・窪田・鶴見大学・東国歴史考古学研究所〕

⑫ 一九九六年一月一六日～一八日 第二次探訪文書整理合宿を実施

第二次探訪文書の整理のため神奈川大学野比研修所で合宿を行い作業を進めた。〔網野・橘川・田上・田



写真 10 第二次探訪文書（1995 年）

- 島・関口・岩田・田口和子・窪田」
- ⑬ 一九九七年三月一四～一八日 二神家墓地第二次調査を実施
この調査では中世石塔が発見された。「東国歴史考古学研究所」
- ⑭ 一九九九年五月三〇日 関口「第一回二神島交流会記念講演会」にて講演
二神島集会所で開催された二神交流会で講演を行った『海の民 ふたがみ』第一号、二〇〇〇年九月）。
- ⑮ 一九九九年二月二日～四日 調査下見および中島町長等へ挨拶のため訪問
挨拶のため中島町長、教育長、愛媛新聞社を訪問する。「橋川・田代郁夫・窪田」
- ⑯ 二〇〇〇年一月一六日 墓地地権者へ承諾を得るため岡山県に出張
二神氏遠縁の黒瀬氏（墓地地権者・岡山県）宅へ承諾を得るため訪問する。「橋川・窪田・二神系譜研究会」
- ⑰ 二〇〇〇年一月二〇日 神奈川大学共同研究奨励助成金による調査打ち合せ
本研究所において「伊予二神島および二神氏に関する総合的研究」申請のための打ち合わせを行う。「網野・橋川・西・田上・鶴見大学・東国歴史考古学研究所・紀伊國屋書店」
- ⑱ 二〇〇〇年三月八日～一二日 二神家墓地第三次調査とビデオの撮影を実施
紀伊國屋書店によりビデオ「二神島」の撮影が行われた。「網野・西・橋川・東国歴史考古学研究所・鶴見大学・紀伊國屋書店」
- ⑲ 二〇〇〇年九月 中島町文化講演会「二神墓地調査からみてきたもの」を講演
考古調査の成果として中島町主催中島町文化講演会で講演を行った。「橋川・田代・大三輪龍彦・窪田」
- ⑳ 二〇〇〇年一〇月六日 常民研究会「二神氏墓地遺跡発掘調査中間報告会」にて報告
常民研究会において考古調査の成果発表が行われた。「東国歴史考古学研究所」
- ㉑ 二〇〇一年二月二四日 ビデオ「二神島」上映会を開催
神奈川大学図書館においてビデオの上映会を開催した。
- ㉒ 二〇〇一年三月一四～二〇日 二神家墓地遺跡実測調査を実施
二神家墓地調査の補充調査を実施した。「橋川・西・窪田・東国歴史考古学研究所」
- ㉓ 二〇〇一年三月一六日 ビデオ「二神島」上映会を開催
二神島の二神集会所においてビデオの上映会を行った。
- ㉔ 二〇〇一年七月九日 二神島調査検討会を開催
本研究所において今後の二神島調査について検討した。「田上・橋川・窪田・大三輪・河野・田代」
- ㉕ 二〇〇一年九月九日 橋川「二神氏学習交流会イン豊後森」に参加
橋川が大分県玖珠町において開催された「二神氏学習交流会イン豊後森」に参加し挨拶を行った『海の民 ふたがみ』第四号、二〇〇二年四月）。
- ㉖ 二〇〇一年十一月 平成一四年度科学研究費基盤研究（B）申請するも不採択
- ㉗ 二〇〇二年一月二二日 関口「二神家・二神島・由利島」を報告
本研究所で開催された「二神研究会」で二神島調査の成果を報告した。
- ㉘ 二〇〇二年三月一〇～一二日 中島町保管文書および二神島・由利島考古補充調査を実施



写真 11 現地での資料整理（1995 年）

中島で中島町保管文書の調査を行った。また、由利島の考古補充調査を実施した。「橘川・田上・田島・福田アジオ・白水・関口・窪田・東国歴史考古学研究所・鶴見大学」

②二〇〇二年九月一日「二神島交流会」にて「二神司朗家文書の整理と研究」を報告

二神集会所で開催された「第三回二神島交流会」において橘川・関口が講演した『海の民ふたがみ』第五号、二〇〇三年。

〔4〕神奈川大学時代Ⅲ期の活動（二〇〇七年四月～現在）

このⅢ期は、二〇〇七年から現在までの期間で、二〇〇八年度から本格的に着手された共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」の事業に伴うさまざまな活動が主体となる。

先のⅡ期からこのⅢ期まではかなり間隔が開いた。二〇〇三年度から五年間にわたり、文部科学省から採択された二一世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマとする事業に、本研究所など三機関が取り組まなければならなかったこともその一因と考えられる。それでも途切れることなく、その間、研究所においては、二神家文書の整理、写真撮影、目録作成などの作業が着々と進められていた。

このⅢ期の取り組みとしては、まず、二〇〇七年六月一日、近世二神家文書の解説を目的として立ち上げた「二神文書研究会」が挙げられる。当初、この研究会は二神家文書に関心のある数名の参加者によって隔週で進められていたが、研究素材としてきわめて重要な文書群であることが分かり、二神家文書を基礎にした二神島の研究の必要性を痛感するに至った。そこで、二〇〇八年度からは共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」が本研究所の正式な共同研究として開始される運びとなった。その準備として二〇〇八年七月二十八日には、二神島関係のこれまでの経過と今後の取り組みについて検討会が持たれた。その結果、同年九月七日から九日まで二神島の現地調査を実施することが決まり、文書班が中心となって二神島漁業協同組合文書や他家所蔵文書の調査を行った。

この共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」は、題名が示すように歴史学だけでなく、民俗学、それも歴史学と民俗学を別々に研究するのではなく、単独ではなしえない研究を歴史民俗学として追究することを目的としていた。加えて、民具学、建築史学、考古学、文化人類学など専門分野の異なる研究者が共同で進める学際的な研究を目指すものであった。二〇〇九年九月一日から四日まで行われた二神島・中島の調査の参加者の顔ぶれが、そのことを端的に物語っている。その調査には、佐野賢治、田



写真 12 シンポジウム「忽那諸島の歴史を探る」にて講演する関口（2010年）

上繁、津田、中村政則、森武鷹、福田アジオ、窪田など所員・職員が歴史民俗資料科学研究科大学院生とともに参加し、二神島漁業協同組合文書や青年団関係文書の写真撮影作業、青年団に関する古老からの聞き書き、民家の調査など学際的な共同調査を内容としている。翌二〇一〇年九月三日から八日までの日程で行われた二神島調査にも、佐野・小熊誠・田上・津田・前田禎彦・森・安室知・関口・石野律子・窪田・萬井良大や歴史民俗資料科学研究科大学院生、建築学科学部生などが参加しており、名実ともに学際的な研究を推進する形が整えられつつあった。

こうした現地調査の傍ら、研究成果の一部を中間報告の形で発信する機会もつくられた。二〇一〇年九月四日に松山市中島総合文化センターで開催されたシンポジウム「忽那諸島の歴史を探る」には、関口が講演を（写真12）、翌五日に二神島集會場で開かれた二神系譜研究会には、田上が「二神文書目録と二神氏関係系譜史料の紹介」の報告を、それぞれ行っている。

その後、二神島の現地調査は、二〇一一年度には八月二十九日から九月一日までと、二〇一二年三月一二日から一五日までの二度実施したが（写真13）、後者の調査には新たな要素が加わった。その調査には、佐野・田上・関口・金泰順・古谷野洋子・窪田・研究所職員越智信也、院生に加え、韓国から木浦大学校・姜鳳龍島嶼文化研究院院長、洪善基同教授、中国から上海海洋大学・韓興勇経済管理学院教授も参加した。これは、本研究所を拠点とする文部科学省認定共同研究拠点・国際常民文化研究機構の学術交流の一環として実施した共同調査である。さらに、共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」を進める二神島および周辺の瀬戸内海域の調査は、その後も、二〇一二年九月四日から七日まで、二〇一三年三月二日から二五日まで、二〇一三年九月一五日から一七日まで、二〇一四年一月二五日から二八日までと、文書班、墓石班（写真14）、木造船班などによって継続して、毎年現地調査が実施された。

また二〇一〇年一月より、前田を中心に研究員の鈴木江津子、萬井、越智、窪田による、中世二神文書の読解を中心とした自主的な研究会も活動を開始した。ここでは予章記、忽那文書など中世の二神家と深い関わりのある史料も併せて読み込んだ。この研究会の成果は、二〇一六年三月に刊行された『二神司朗家文書 中世文書・系図編』として結実した。

この間、数年の調査の成果を得て研究成果をまとめる具体的な計画も立てられ、文書目録、論文集、図説、文書史料集、墓石関係報告集、和船関係報告集など各種刊行物を順次公刊することとなった。ただ、図説については資料の収集が遅れ、執筆者の取り組みの準備も整わなかったため先延ばし



写真14 二神家墓地調査 (2012年)



写真13 現地での資料整理 (2011年)

することになった。ところが、図説に利用する写真を収集するために、あるお宅を訪問したところ、家の奥からお菓子の空箱に入ったたくさんの古い写真を出してきてくださった。二〇一一年八月の調査のときに、島民の皆様へ調査の状況を説明するために開いた集会でその古い写真を見せたところ、島のお年寄りが少年・少女に戻ったかのように盛り上がったことがあった(写真15)。写真を提示した私たち調査員は、論文集や史料集を刊行する前に、写真や図絵資料を使った資料集をまとめて、島の人たちに提供する方が重要であることに気付いた。何よりも、現在わずか九〇世帯ほどが暮らす小島であるにもかかわらず、しかも、誰もがカメラを持ち得ない時代に一〇軒から提供された写真が優に二万点を越えるという事実に驚きを感じ得なかった。こうした経緯で生まれたのが、本研究所にとって新たなジャンルとなる写真資料集であった(写真16・17)。

続いて、二〇一四年二月二四日から二五日までの日程で行われた調査では、主に『島の写真帖 vol.1 二神島写真資料集』に収録する写真の提供者宅を訪ね、借用写真を、また、二〇一五年二月一二日から一四日までの調査では、二神家文書の一部を構成する別置文書や襖下張り文書などの追加調査と室内の片付けを、二神系譜研究会の方々と一緒に旧二神司朗家宅で行った(写真18・19)。同時に、写真資料集『島の写真帖 vol.1 二神島写真資料集』に収録した借用写真を提供者宅に返却するとともに、次号に載せる写真を別の提供者から借用した。

二〇一五年度は、七月三日から五日までの日程で、完成した『島の写真帖 vol.1 二神島写真資料集』(二〇一五年五月刊)を写真提供者宅へ謹呈するため二神島を訪問し届け、旧豊田造船所視察を行った(写真20・21)。加えて、一月七日から八日まで松山に出張し、二神系譜研究会創立一五周年記念行事に出席した。二〇一六年一月二二日から二四日までの調査では、木造船研究班が造船職人からの聞き取りと船道具の調査を進め、併せて、文書班が『島の写真帖 vol.3 二神島写真資料集』に収載予定の写真を借用するとともに、松山市三津浜の清水写真館の店主より聞き書きを行った。

③〇二〇〇七年六月一三日 二神家文書研究会開始

二神家文書の近世文書を解説する目的で発足した隔週開催の自主的な研究会で、その後の共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」へ連なる出発点となった勉強会である。同研究会は発展的に解消された。

③①二〇〇八年度の所員会議において瀬戸内海の共同研究の実施について議論

二〇〇八年五月二一日所員会議において、共同研究「瀬戸内海の総合的研究」を進めていく方向性が提案された。また、七月一六日の所員会議においては予備調査日程などが提示された。



写真 15 現地説明会 (2011 年)

- ③二〇〇八年七月二八日 常民研究会でこれまでの二神島の研究について報告
共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」の一環として、本研究所において二神島関係のこれまでの取り組みと歴史事象について検討する。
- ③三二〇〇八年九月七日～九日 二神島の現地調査を実施
二神島内、中島大浦周辺巡検「佐野賢治・田上・田島・福田・越智・窪田」
- ③四二〇〇九年一月六日、臨時所員会議において、共同研究について再び議論がなされる
神奈川大学箱根保養所で行われた臨時所員会議において、改めて二神島を中心とした瀬戸内海地域の歴史と民俗の共同研究を行うことを決定。「瀬戸内海の歴史民俗」を正式名称とすることとなる。
- ③五二〇〇九年九月一日～四日 二神島の現地予備調査を実施
二神島・中島の調査を行ったが、文書調査に加えて佐野・福田など民俗班の参加により、共同研究が学際的な性格を有するようになった。「佐野・田上・津田・中村政則・福田・森武歴」
- ③六二〇一〇年九月三日～八日 二神島の現地調査を実施
歴史学、民俗学、建築史学を専門とする所員と院生・学部生など総勢二〇名で二神島の調査を行った。「佐野・小熊誠・田上・津田・前田禎彦・森・安室知・関口・石野律子・窪田・萬井良大」
- ③七二〇一〇年十一月 中世二神家文書研究会開始
中世二神家文書を読解する自主的な研究会が開始される。
- ③八二〇一〇年九月四日 関口がシンポジウム「忽那諸島の歴史を探る」で講演
松山市中島総合文化センターで開催されたシンポジウムに関口が講演した（『海の民 ふたがみ』第一三号、二〇一〇年）。
- ③九二〇一〇年九月五日 田上が「二神文書目録と二神氏関係系譜史料の紹介」を報告
二神集会所で開催された二神系譜研究会で田上が報告した（『海の民 ふたがみ』第一三号、二〇一〇年）。
- ④〇二〇一一年八月二九日～九月一日 二神島の現地調査を実施
文書班と民俗班による文書調査と墓地および民俗調査を行った。「佐野・田上・前田・関口・大野一郎・金泰順・古谷野洋子・萬井・越智・窪田・院生」
- ④一二〇一二年三月二日～五日 国際学術共同研究調査および現地調査を実施
韓国木浦大学から姜鳳龍島嶼文化研究院院長、洪善基同教授、上海海洋大学から韓興勇経済管理学院教授が参加し、国際的な共同調査となった。「佐野・田上・石野・関口・金・古谷野・萬井・越智・窪田・院生」
- ④二二〇一二年九月四日～七日 二神島の現地調査を実施
文書班による二神漁業協同組合文書、青年団関係資料の撮影および民俗班による墓地、葬送民俗の調査を行った。「佐野・田上・津田・田島・金・萬井・越智・窪田・院生」
- ④三二〇一三年三月二日～五日 二神島の現地調査を実施
文書班による二神漁業協同組合文書、青年団関係資料の撮影および民俗班による墓地、葬送民俗の調査を行った。「田上・小熊・萬井・金・古谷野・窪田・院生」
- ④四二〇一三年九月一日～一七日 二神島の現地調査を実施



写真 17 写真資料の整理 (2012 年)



写真 16 写真資料の借用 (2012 年)

文書班による二神漁業協同組合文書、青年団関係資料の調査と民俗班による墓地、葬送民俗の調査を行った。〔佐野・田上・田島・萬井・金・古谷野・越智・院生〕

④五二〇一四年一月二五日～二八日 二神島の現地調査を実施

墓石班による二神島の墓地と葬送民俗の調査を実施した。〔佐野・萬井・古谷野・院生〕

④六二〇一四年二月二四日～二五日 二神家文書補充調査と写真資料集の写真借用

文書班による二神漁業協同組合文書、青年団関係資料の調査を行うとともに、『島の写真帖 vol.1 二神島写真資料集』に収録した写真を所蔵提供者宅へ返却する。〔田上・窪田・院生〕

④七二〇一五年二月二日～一四日 二神家襖下張り文書の整理と写真資料集の写真借用

文書班と二神系譜研究会有志により二神家に残る文書（襖下張り文書と文書追加分）を確認、整理する。また、『島の写真帖 vol.2 二神島写真資料集』に収録予定の写真を提供者宅から借用した。〔田上・窪田・院生〕

④八二〇一五年七月三日～五日 『写真資料集』一巻目を収録写真提供者宅へ謹呈

『島の写真帖 vol.1 二神島写真資料集』（二〇一五年五月刊）の借用写真を写真提供者宅に届けた。併せて、旧豊田造船所視察も実施した。〔田上・昆政明・窪田〕

④九二〇一五年一月七日～八日 二神系譜研究会創立一五周年記念行事に出席

松山市で開催された二神系譜研究会創立一五周年記念行事に招かれ出席した。〔前田・鈴木・萬井・越智・窪田〕

⑤〇二〇一六年一月二日～二四日 二神島・中島等の現地調査を実施

文書班による借用写真の整理と木造船研究班による旧豊田造船所資料調査を実施した。清水写真館（三津浜）店主からの聞き書き調査を行った。〔田上・昆・石野・窪田・院生〕

⑤一二〇一六年三月二六日～二八日 二神島・中島等の現地調査を実施

二神島の旧豊田造船所に関する資料、道具類の調査を進めた。〔石野・萬井〕

⑤二二〇一六年三月三〇日～三一日 二神島等の現地調査を実施

借用資料の返却および新刊行物寄贈のため二神島訪問、併せて二神系譜研究会との打合せを行った。〔田上・前田・鈴木・萬井・窪田〕

〔5〕日本常民文化研究所関係者による調査・研究の成果

1. 調査報告・研究報告（二〇一五年以前）

(1) 河岡武春・網野善彦『共同漁業権への依存度に関する調査』（一九五六年。写真22）

(2) 網野善彦「史料紹介 伊予国二神島をめぐる――二神氏と「二神文書」」（『歴史と民俗』一、一九八六年）



写真 19 襖下張り文書（2014年）



写真 18 調査対象となった襖（2014年）

(3) 西 和夫 「二神島の集落と民家―集落の空間構成、民家の特色と家に祀る神々のことなど」(『歴史と民俗』二、一九八七年)

(4) 網野善彦 「二神島の調査について」(『歴史と民俗』一三、一九九六年)

(5) 関口博巨 「二神家文書の概要調査と整理」(『歴史と民俗』一三、一九九六年)

(6) 白水 智 「二神家伝来の古銭について」(『歴史と民俗』一三、一九九六年)

(7) 白水 智 「二神島安養寺所蔵 大般若経の奥書について」(『歴史と民俗』一三、一九九六年)

(8) 西 和夫 「二神島と由利島の建築―一九九五年の調査結果について」(『歴史と民俗』一三、一九九六年)

(9) 永井久美男 「近世銭貨の流通―二神家伝来古銭の調査を中心として」(『歴史と民俗』一四、一九九七年)

(10) 網野善彦 「海の領主―二神家と二神島」(『中央公論』一〇月号、一九九八年。のち、『古文書返却の旅―戦後史学史の一齣』中央公論新書、一九九九年に所収)

(11) ビデオ「二神島」(全三巻) 第一巻「海で結ばれた世界」瀬戸内海二神島―新しい歴史の見方 第二巻「海の民の歴史」二神家の歴史を通して―文書と物から歴史を読み解く 第三巻「発掘調査の実際」二神家墓地遺跡発掘現場から―学術的調査発掘の手引き(監修・神奈川大学常民文化研究所、紀伊國屋書店、二〇〇〇年。写真23)

(12) 田代郁夫・若松美智子 「二神家墓地調査中間報告」(『歴史と民俗』一八、二〇〇二年)

(13) 網野善彦 特別寄稿「二神島と日本常民文化研究所」、津田良樹「二神島に現存する民家と文献資料とを総合すれば」(『海の民 ふたがみ』第九号、二〇〇六年)

(14) 萬井良大 特別寄稿「二神家における系図の変遷と系譜意識」(『海の民 ふたがみ』第一五号、二〇一三年)

2. 調査報告・研究報告(二〇一五年度以降)

(1) 論文集『論集「瀬戸内海の歴史民俗」』(田上繁・関口博巨・萬井良大・森武磨・鈴木江津子・河野通明・安室知・古谷野洋子、二〇一六年)

(2) 報告集『二神島 葬送と墓の民俗』(佐野賢治監修・金泰順・古谷野洋子・豊田渉・中村慧・萬井良大、二〇一六年度刊行予定)



写真 21 旧豊田造船所視察(2015年)



写真 20 旧豊田造船所内部(2015年)

(3) 報告集『二神島の木造船調査報告』（昆政明・石野律子、二〇一七年度刊行予定）

3. 文書史料集

- (1) 『二神司朗家文書 中世文書・系図編』（前田禎彦監修・越智信也・窪田涼子・鈴木江津子・萬井良大、二〇一六年三月。写真24）
- (2) 『二神司朗家文書 近世文書（一）』（田上繁・関口博巨・古文書講読講座受講者、二〇一七年度刊行予定）
- (3) 『二神司朗家文書 近世文書（二）』（田上繁・関口博巨・古文書講読講座受講者、二〇一七年度刊行予定）

4. 写真資料集

- (1) 『島の写真帖 vol. 1 二神島写真資料集』（田上繁、二〇一五年五月。写真25）
- (2) 『島の写真帖 vol. 2 二神島写真資料集』（田上繁、二〇一六年二月。写真26）
- (3) 『島の写真帖 vol. 3 二神島写真資料集』（田上繁、二〇一六年度刊行予定）
- (4) 『島の写真帖 vol. 4 二神島写真資料集』（田上繁、二〇一七年度刊行予定）

5. 文書目録

- (1) 『二神司朗家文書目録（一）中世・近世編』（二〇一二年八月。写真27）
- (2) 『二神司朗家文書目録（二）近代・現代編1』（二〇一三年三月）
- (3) 『二神司朗家文書目録（三）近代・現代編2』（二〇一六年三月）
- (4) 『二神司朗家文書目録（四）近代・現代編3』（二〇一六年一〇月）

6. 調査対象の史料と整理・保存

- (1) 二神司朗家文書
- （ア） 中世文書 卷子四卷
- （イ） 系図 卷子三卷
- 以上は『二神司朗家文書 中世文書・系図編』として翻刻、刊行



写真24 『二神司朗家文書 中世文書・系図編』



写真23 ビデオ「二神島」

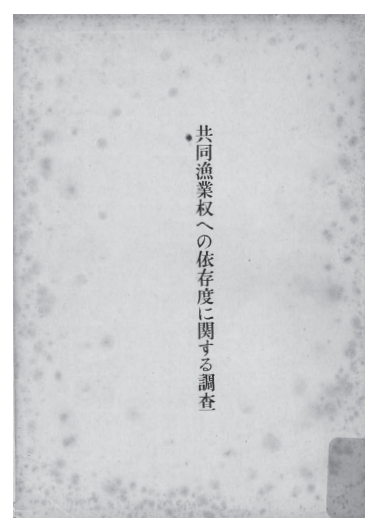


写真22 『共同漁業権への依存度に関する調査』

(ウ) 近世文書

- ・ 第一次（一九五四年）探訪分 約三四五点
- ・ 第二次（一九九五年）探訪分 七〇四六点

以上を『二神司朗家文書目録（一）』（四）』として目録化

(2) 二神島漁業協同組合文書

(ア) 豊田渉氏保管

(イ) 杉山邦子氏保管

(3) 青年団関係文書（豊田渉氏保管）

上述した一連の内容が、二神島と二神家に関する本研究所の調査・研究の歩みである。一九五〇年に宮本常一が研究員としてはじめて二神島を訪ねて以来、すでに六十五年もの長い歳月が流れていく。財団法人日本常民文化研究所時代に発生した「二神文書」の一部の未返却という事態が契機となって始められた調査・研究であったが、その後の研究は何度かの中断をはさみながらも継続され、「二神文書」についても、本研究所に譲渡するという二神司朗氏の英断により、二神家系図一点（二神司朗氏の申し出による返却）を除いたすべての文書が本研究所で安全に保管されている。

その私たちの調査・研究に甚大なるご理解とご支援をいただいた二神司朗氏は一九九九年に、また、その司朗氏と親交を持ち、「二神文書」に最も深く関わられた網野善彦氏も二〇〇四年に、すでに鬼籍に入られている。二神島の民家調査を主導された西和夫氏、墓石発掘調査で陣頭指揮を執られた鶴見大学大三輪龍彦氏、現地調査に参加された所員の中村政則氏にもうお会いすることはできない。河岡武春氏は神奈川大学に赴任されて間もなく逝去され、長く所長の任にあった山口徹氏も二〇一六年一月に永眠された。このような偉大な先輩諸氏を失うことは非常に辛いことであるが、二神島という小さな島で一緒に寝起きし、調査・研究ができたことがいかに恵まれていたか今更ながら気付かされる。ご冥福をお祈りするとともに、改めて感謝を申し上げたいと思う。

しかし、先輩諸氏が最も危惧されていたことは、二神島と二神家を中心とした調査の成果がどのような形でまとめられ、発信されるかといったことではなかっただろうか。そのご心配を少しでも拭うために、本論文集の刊行を皮切りに、歴史民俗に関する研究成果を順次公刊していきたいと考えている。本年度と来年度に大方の刊行物を発行し終え、これまでの共同研究に一応の区切りをつける予定

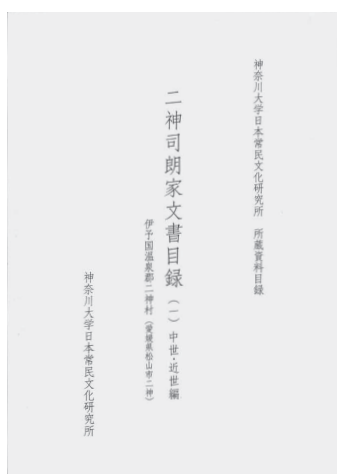


写真 27 『二神司朗家文書目録 (一) 中世・近世編』



写真 26 『島の写真帖』 vol.2



写真 25 『島の写真帖』 vol.1

である。ただ、中世の「海の領主」である二神氏については、島だけではなく陸地側の宅並地区での動向が重要な意味を持っていたとの指摘もなされており、今後、違った切り口からの分析が要請されるかも知れない。

戦後間もない一九五〇年代から着手した二神島の調査・研究活動は、財団常民研時代、ならびに神大常民研時代を通して六十年余もの長きにわたる。瀬戸内海の小島二神島という特定の場所を対象として、ほぼ継続的にこのような長期の調査を展開することは、全国的にも希有な事例であるといえよう。これまでも研究の成果は公表してきたが、集大成として本年度から論文集や各種報告書、文書目録や史料集などを順次公刊する運びとなった。これも、島民の皆様を始め、資料所蔵者、二神系譜研究会、旧中島町、松山市などご当地の関係各位のご理解とご支援のお陰と心より感謝の意を表したい。また、調査に積極的に参加された歴史民俗資料学研究科を始めとする多数の大学院生や学部生に対しても、改めてお礼を申し上げたい。

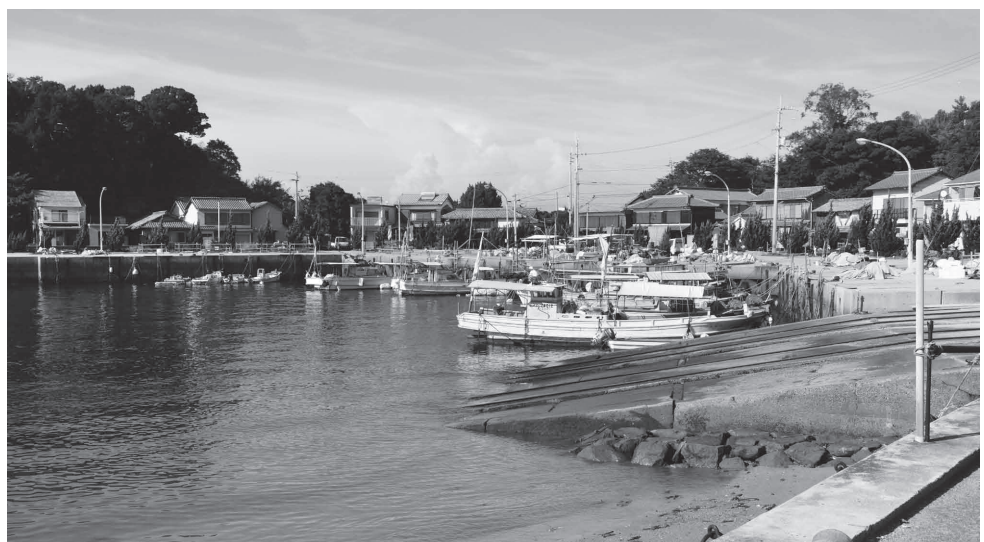


写真 28 二神港 (2012 年)